

東京電機大学教職校友会

令和8年度 第46号

會報



メールアドレス登録
ご協力ください



東京電機大学教職校友会 会報 第46号

CONTENTS

- 3 会報第46号に寄せて 会長 丸茂 聡
- 4 特集 学校紹介・教育実践紹介
 - 4 東京都 坂本 純一（城西大学附属城西中学高等学校）
 - 6 静岡県 今野 由季子（静岡県立吉原工業高等学校）
 - 7 佐賀県 幟持 佳明（佐賀県立佐賀工業高等学校）
 - 9 東京都 河野 恒義（東京都立六郷工科高等学校）
- 12 令和7年度・8年度の活動について
- 13 令和8年度 顧問・役員・幹事一覧
- 14 令和8年度 教職校友会会員数
- 15 教職校友会会則
- 16 会費納入のお願い

＜表紙の題字「会報」は、初代学長丹羽保次郎先生の揮毫によるものです＞

— お知らせ —

- *学校別の会員名簿は、個人情報保護の観点から掲載をしていません。
- *会員への問い合わせ先等必要な場合は一般社団法人東京電機大学校友会にお問い合わせ下さい。教職校友会の定める「個人情報保護に関して」（平成17年制定）及び一般社団法人東京電機大学校友会の定める「個人情報保護規則」（平成30年制定）により対応します。
- *会員への当会からの連絡はご自宅住所宛を原則とします。住所変更、勤務先変更等がありましたら「一般社団法人東京電機大学校友会」にご連絡ください。

会報第46号に寄せて

東京電機大学教職校友会会員の皆様には、日頃から本会の活動に御理解と御協力を賜り、誠にありがとうございます。

今般、「学校教育法」及び「学校教育法施行規則」の改正により、学校に主務教諭が設置できることとなり、校務分掌上の主任における主務教諭の位置付けが規定されました。

主務教諭の設置により「学校の組織的・機動的な学校運営体制の充実が図られることが期待されている。」「職員間の総合的な調整を行うといったことから、若手教師への支援や校務の効率化に資するものとして設置されている。」とのことです。主務教諭の扱いは各自治体の判断になりますが、新たに設置するとなれば、環境整備や関係機関との調整に多くの時間と労力が必要になるものと思われます。従前より「東京都立学校の管理運営に関する規則」により「主任教諭」として主務教諭と近い職を設置していた東京都においても、その位置づけを整理するなど、様々な対応が行われているところです。また、国は主務教諭の設置のほかに「公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法」(給特法)を改正して教員の待遇改善を目指しています。

これら改定の背景の一つとして教員志望者の減少や若手教員の離職等があり、その歯止めとなることが期待されているものと考えます。実際の効果については今後の推移を注視していくことになりますが、これらのことを機会として、各自治体だけではなく、世論全体としても教員の働き方に関するより一層の改革が議論されることを期待しているところです。

一方、AIをはじめとした技術革新が急激に進展している現在、志を高く持ち、技術者・研究者としての知識・技能を有した人材に教職を担っていただくことが急務であることに変わりはありません。毎年大学から示されている「教職校友会枠推薦制度」に基づき、本会から将来有望な人材を大学に推薦することは母校の発展に寄与するとともに、工業教育や理数教育を担う次世代の教員を輩出することにつながるものと確信しています。

本会の目的は、大学と校友会との緊密な連携のもと、相互の発展に協力し、会員の資質向上と親睦を図ることにあります。様々な力量が求められる現在、全国で多くの会員が意欲的に活動していることをこの会報を機会として知っていただくとともに、本会を会員相互の交流の場として、既に御退職された諸先輩方の経験や現在活躍されている皆様の工夫を知る機会としていただければ幸いです。

最後になりましたが、本会の運営に当たり、多大な御尽力を賜っております、校友会をはじめ幹事の皆様に、改めてお礼を申し上げます。

今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

令和8年7月吉日

東京電機大学教職校友会
会長 丸 茂 聡

特集 学校紹介・教育実践紹介

会誌 46 号の特集には、4 名の会員からそれぞれの学校における特色ある教育の報告が寄せられました。

東京都

大正自由教育と国際交流を軸に据え、自己肯定感を育てる教育

城西大学附属城西中学高等学校 入試広報センター長

坂本 純一

■ 城西学園の創立

城西大学附属城西中学高等学校は、1918（大正 7）年に中島久万吉らによって、貿易実務を学ぶ「城西実務学校」として創立されました。その後、1925（大正 15）年には野口援太郎らが、大正自由教育の実践校として運営を担います。そこでは人類愛に根ざした「天分の伸長」「個性の尊重」「自発活動の尊重」「人間の尊厳」「平等主義」が掲げられました。

1934（昭和 14）年、逓信省で外交文書の和訳に従事していた新藤富五郎先生が英語教師として赴任します。新藤先生は学園長として、戦中・戦後の最も困難な時代においてもネイティブ教員を擁して英語教育を強化しました。こうして、現在に至る本校の国際交流やグローバル教育の礎が築かれました。

■ 大正自由教育の実践校として

「本物・体験を通した学び」

第二代校長の野口援太郎は、大正自由教育の精神を最も純粋に追求した学校といわれる「池袋児童の村小学校」を創設した人物です。野口は「子どもには、先生と場所と時間を選ぶ自由がある。万事自由がよい。世の中には自由の行き過ぎを心配する人もいるが、そういう人間は自由が嫌いなのだ。自由は行き過ぎるくらいがよい」という考えを持っていました。

そのため、時間割もチャイムもなく、決まっているのは始業の 9 時と終業の 3 時のみでした。子どもの中には、一日中本を読む子、絵ばかり描く子、庭の椎の木に登って遊ぶ子もいました。一方で、文芸でも芸術でも常に「最高のもの」に触れさせ、優れた絵画を鑑賞したり、音楽会に出かけたりもしました。生徒は毎日自分で時間割を決め、科目別の教室に出向き、学年の枠を取り払って自由に勉強します。作業教育では科学実験に使う物理器具や化学製品の制作、木工、図画、園芸なども行われました。城西学園が実践してきた教育は、教科横断型で体験を重視

し、自発活動を促すものでした。これはまさに、現在多くの学校が取り組んでいる「探究」そのものです。100 年以上前から、城西学園にはこうした教育の実践があったのです。



■ Josai Future Global Leader Program

野口が掲げた「自発性を尊重し、自尊心を築く教育」は、現在、自己肯定感の定着を目指す「Josai Future Global Leader Program」として展開されています。令和の現在では、サマースクール（中 1）、京都研修（中 2）、芸術鑑賞会や音楽祭（全校）、オーストラリア研修（中 3）、国内・海外探究型修学旅行（高 2）などに姿を変えて受け継がれています。

特に高校生向けの探究プログラム「BEYOND」や「αゼミ」は、その象徴と言えるでしょう。以下は、昨年の高校 1 年生が計 20 時間をかけて取り組んだ「BEYOND」のテーマ一覧です。

ホモサピ探求：ヒトは地球上でどんな存在か？

社会貢献：国連のプロフェッショナルと「社会貢献行動計画」を作ろう

メディア：情報化社会を読み解き、自分なりのコンテンツを作成せよ

SDGs：地球規模の課題に英語で挑戦する

ビジネス：新しいビジネスを生み出す楽しさを体験しよう

未来創造：ディズニーランドや万博に関わった講師と学ぶ「未来妄想プロジェクト」

科学：社会の中にある「科学」を探して伝えてみよう

命の探究：国際協力の事例をもとに「いのち」を考える

常識を疑う：恋愛・教育・お金・戦争など、社会の「当たり前」を紐解く

海外挑戦：自分の留学計画を作ってみよう

教育：私たちは、なぜ学校に行くのだろう

■ αゼミ 超実践型のキャリア探究プログラム

コロナ禍で修学旅行先が国内に変更された際、岡山県を訪れたグループが、過疎化が進む集落の地域創生案を提案しました。生徒たちは地元の方々や役場の前でプレゼンを行い、その中の一つのグループ（当時高2の女子）が入浴剤の商品開発を提案しました。その後、約1年かけてオンラインで現地の方々と会議を重ね、ついに商品化を実現。この活動はNHKでも大きく取り上げられました。この経験は彼女たちの大学選びにも大きな影響を与えています。

この活動が現在「αゼミ」に進化し、希望制の探究プログラムになっています。生徒たちが自身の関心に応じて地域創生やSDGsなど様々なテーマを掲げて社会とつながり、1年以上にわたって教員と共に活動に取り組んでいます。

■ 国際交流プログラムの展開

1982（昭和57）年にアメリカ・オレゴン州から長期留学生を受け入れて以来、隔年での交換留学制度がスタートしました。当初の33年間で58名だった留学生数は、2015年からの5年間で39名へと急増しています。短期留学を含めると、2017年の1年間で155名を受け入れました。アメリカだけでなく、欧州、オセアニア、アジアなど、非常に多様な国々から留学生が集まっています。

本校には「インターナショナル」と名の付く特別

なクラスはありません。留学生を高校の全クラスに配置することで、生徒全員にとって交流が「当たり前」の環境を作っています。世界中から集まった留学生たちが、日本語を通じてつながる面白さが風土として根付いているのも特徴です。また、日本からの派遣も活発で、毎年数十名の中高生が海外へ学びに出向いています。現在では8か国に16の姉妹校・提携校を有しています。

中学3年生は全員、オーストラリアでの2週間研修に参加します。現地校で一人一人にバディがつき、英語で授業を受け、ホームステイで現地の生活を共にします。初めて親元を離れ、五感をフルに働かせて自分の力を試す中で、英語力はもちろん、異なる文化や価値観を肌で感じ取ってきます。



こうした取り組みを継続してきた結果、2023、24年度と連続で英検取得率・全国私学第1位という目に見える実績が出てきました。さらに「USデュアルディプロマプログラム（DDP）」によって本校に在籍しながら、放課後にアメリカの高校の授業をオンラインで受講し、卒業時に日米両方の卒業資格を同時に取得できる体制も実現し、ビジネス、美術、海洋学、英文学などリベラルアーツを網羅した科目が揃っており、卒業時には全米トップクラスを含む30以上の海外大学への入学が保証されます。さらにイタリア、メキシコの学校とも交流が始まり、校内にしながら世界の空気を感じることができる学園環境が整い、今後の教育内容の拡充と成果に期待を寄せています。



「わたしたちは未来のかたちをつくる」^[1]

静岡県立吉原工業高等学校 教頭

(令和 8 年 3 月まで、静岡県立科学技術高等学校 教頭)

今野 由季子

■ はじめに

工業科と理数科を併置し、全国の工業系専門高校の中でも屈指の先進的な設備と、高い進学・就職実績を誇る、静岡県立科学技術高校を御紹介します。

■ 静岡県の工業教育を支える拠点校

静岡県立科学技術高校は、平成 20（2008）年、県立静岡工業高校（大正 7（1918）年設立）及び県立清水工業高校（昭和 36（1961）年設立）を再編し、「ものづくりを通して、未来を切り拓く感性と創造力を培い、社会に貢献できる科学技術のスペシャリストを育成する」というスクールミッションを掲げ、新しい専門高校として誕生しました。在校生と同年代に誕生した若い学校であり、同時に母体となる学校から見れば、静岡県の工業教育とものづくりを 100 年以上支えてきた伝統校です。

■ 2つの大学科と7つの工業科を持つ大規模校

全日制では「工業科」及び「理数科」の二つの大学科を併設し、工業科には7つの小学科「機械工学科」「ロボット工学科」「電気工学科」「情報システム科」「建築デザイン科」「都市基盤工学科」「電子物質工学科」があります。

■ 「得意な事」で自分の進路を切り拓く

科学技術高校では、普通高校と比べると、専門領域について実践的で深い学びを提供できます。この強みを「専門高校枠」「総合型」「指定校推薦」で進路実現へ繋がります。令和 6 年度、工業系専門高校の学校から国公立理工科系大学等へ推薦入学等による進学で全国 2 位の実績を収めました。^[2]

同時に伝統校のブランド力から就職率は開校以来 100 %です。

■ 技能を磨く場を支える、各学科の技術指導

- 1 地元熟練技術者からの熱い支援～機械工学科～
溶接、旋盤、フライス等、学科部活の時間を用いて技能の指導を受け、技能試験合格や令和 6 年高校生ものづくり大会コンテスト東海大会

全国大会では敢闘賞を受賞しました。

- 2 基礎技術と先進技術の融合～ロボット工学科～
学科部活で平成 7 年 12 月「未来の科学技術者フェスティバル」内で行われた静岡県高校生ロボット競技大会 自律制御ロボット部門に参加し、1 位、3 位を獲得しています。
- 3 高度な国家資格取得者を輩出する実習と学科部活～電気工学科～
在学中に第一種電気工事士、第三種電気主任技術者、2 級電気工事施工管理技士などの高度な国家資格取得を目指し、教室で隙間時間も惜しんで問題集を開く姿も見られます。
- 4 U20 全国一位！熱気あふれる学科部活は常に満席～情報システム科～
令和 7 年 8 月、第 20 回若年者ものづくり競技大会「IT ネットワークシステム管理」職種大会において、見事金賞及び厚生労働大臣賞を受賞しました。同年 12 月には応用情報技術者試験合格者も出ました。
- 5 個別最適な学び～建築デザイン科～
2・3 年次に履修する「製図」では個別のコンセプトによる設計に基いて対話を重ね、手厚く指導します。
- 6 市政へ提案～都市基盤工学科～
静岡市のまちづくりに課題研究で取り組み、東静岡駅前の新デッキ計画について屋根の設置やベンチのある空間など、生徒の提案が実際に採択されています。
- 7 舞台は世界大会～電子物質工学科～



電子工学と化学工学を学ぶ学科です。令和7年8月リトアニアのビルシュトナスで開催された「第22回IARU ARDF世界選手権大会」で入賞を果たしました。

8 科学の芽を育む～理数科～

1・3年次は学校設定科目により工業科の教員による少人数指導を行います。技術と科学とのつながりを体験することが学びの原動力となり、自らの探究心を理系の高等教育へ接続させます。これが工業科に併置された理数科の最大の強みです。

■ 「安心」を、「明日への挑戦」の原動力へ



生徒一人ひとりが安心感の中で充実した学校生活を送り、自己実現を図れるよう、「構成的グループエンカウンター（SGE）」を基盤としたプロアクティブ（予防的・開発的）な心理教育を導入しました。本校

の特徴は、3年間固定のクラス・実習班で展開される集団生活です。この密な人間関係を「人として成長するための素地」とするため、令和8年度は全学年で「コミュニケーションスキル講座」を行いました。「他者理解」と「自己開示」の本質を学ぶことで、生徒同士が互いに高め合える集団へと成熟していくことを目指しています。

■ 「グローバル」な視点を育む

国際的な視野と、自分の住む地域活性化への熱意を併せ持つ人材の輩出を目指しています。海外研修や海外インターンシップに積極的に送り出すだけでなく、地元の谷津山の活用など地元目向のローカル教育の充実も図っています。

■ 全ての生徒のウェルビーイングをめざして

高校の3年間は、能力を十分に伸ばし、一生の土台とするかけがえのない時間です。生徒一人一人にとって幸福で価値ある学校であることを目指し、今後も科学技術高校は静岡県産業を支えて参ります。

【出典】

[1] 「未来のかたちを」

科学技術高校校歌 作詞 三木 卓

[2] 公益社団法人 全国工業高等学校長協会 付属工業教育研究所「令和6年度理工科系大学等への推薦入学等による進学状況調査結果について」

https://zenkoukyo.or.jp/web/content/uploads/r06daigaku_kekka.pdf

佐賀県

『至誠剛健』 ～誠実で心身ともに逞しく～

佐賀県立佐賀工業高等学校 講師

織持 佳明

■ 佐賀の工業教育を支えて128年

佐賀工業高等学校は、1898年（明治31年）「佐賀県工業学校」を前身として、名称や体制とともに、120周年記念式典（2018年）を迎え「ものづくり」の精神を次世代に伝えてきました。

校訓は「至誠剛健（しせいこうけん）」、誠実で心身ともに逞しい人間性を育むことを目指します。地域だけでなく広く産業を支える人材育成のため、ものづくり教育や部活動を通じた人格形成に力を入れています。伝統の中に、技術革新が加速するデジタル

化の新技术を取り入れながら、各科1クラスの専門学科で座学、実習を通じ体系的で実践的に学びます。



機械科：基本的な機械技術の学習を通して学力と技術、安全に対する意識を身に付け、

技能・技術の定着を図ります。

機械システム科：機械の基礎やセンサー技術、制御の基礎など製造分野の自動化に対応する技術を幅広く学習します。

電気科：電力業界の中核となって活躍できる、電気に関する基礎的な知識・技術を幅広く学習します。

電子科：社会に貢献できる、スマートフォンやデジタル放送、ロボット技術、IoT技術などに触れ、電子分野の幅広い知識・技術を身に着けます。

情報システム科：電気と情報、制御技術を学び、設備や機器を動かすシステムの構築や制御・保守・改善に対応できる技術者として活躍できる実践的な人材を育成します。

建築科：建築技術者として実社会で活躍できる、建築構造・計画・設計・法規などに関する基礎・基本を学習し、製図やCADで図面化する技術を身に付けます。

■ ものづくりと文武両道

(1) ものづくりと技術教育

学んだ知識を活かすべく「高校生ものづくりコンテスト」では、電気工事部門や機械加工部門で九州大会の常連であり、木材加工部門で全国2位（令和3年度）、電気工事部門で金賞・厚生労働大臣賞（令和元年度）などを受賞しています。



知識・技術だけでなく、1,400℃以上の鉄を溶かす「キューポラ溶解実習」など、本格的な実習を通じて安全作業への知識・態度を身につけます。

地域とのつながりとして、地元小学生を招いた工作や、3Dプリンターを用いた「ものづくり体験教室」を実施し、次世代へ技術の楽しさを伝えています。

(2) 部活動

充実した高校生活と人間形成の場として仲間と協力し、努力を重ね、心身の発育・発達をめざします。多くの部活動で、社会性を身に付け、人間的に大きく成長します。



運動部 野球部、柔道部、剣道部、山岳部、卓球部、ラグビーフットボール部、バドミントン部、バスケットボール部、ソフトテニス部、バレーボール部、サッカー部、陸上競技部



文化部 電気化学部、機械科学部、ロボット研究部、建築デザイン部、新聞部、図書部、視聴覚部、美術部、吹奏楽部、JRC 同好会

ラグビー部の快進撃：

花園（全国高校ラグビー大会）：44大会連続54度目の出場を果たすなど、全国屈指の強豪校として知られています。第103回大会ではベスト4（3位）に進出する輝かしい成績を収めました。

7人制ラグビー：2023年の「第10回全国高等学校7人制ラグビーフットボール大会」では、公立高校として初の全国優勝という歴史的快挙を成し遂げました。



■ ジュニアマイスター顕彰制度での活躍

社会で役立つ資格取得を学校全体で強力にサポートし危険物取扱者、電気工事士、技能士、二級ボイラー技士、第二級陸上特殊無線技士、施工管理技術検定など高い合格率を維持しています。進路実現の励みとし、積極的にジュニアマイスターのランク向上を目指しています。

令和 7 年度の実績

特別 2 名 ゴールド 13 名
シルバー 27 名 ブロンズ 37 名

■ 進路 就職・進学

地元だけでなく全国規模で各企業から多くの求人が寄せられています。また、進学への意識も高く、スポーツ推薦等も含めて就職・進学の両面で、高い実績を残します。

進路状況（令和 7 年度）

就職者数：民間企業 県内 104 名、県外 75 名、
公務員 7 名、その他 3 名
進学者数：大学 30 名、専門学校等 13 名

■ 思い出 今に至る

最後に私の思いで話にお付き合いください。

三鷹（武蔵野学生寮）からお茶の水 神田 中央線
特快 秋葉原 神保町など

「武蔵野学生寮」（東京電機大学運営の学生寮、東京都武蔵野市にかつてあり、現在は公園となっている）は、4 畳半二人部屋でした。住宅地の真ん中でしたが、夏祭の盆踊り、ファイヤーストーム、寮歌の「世塵に染まぬ若人」を地でいく、まさに昭和の学生生活でした。大学の略称が TEEC から TDU になりました。

教師として

特別支援学校時代、通常の会話が困難な生徒に誠意が通じた嬉しさが、私の教育の原点です。

工業高校（全日・定時）時代、教科書等の原理を

体感できる具体的な教材、マイコン制御ロボット・誘導型浮上走行リニアモーターカーを自作、動く状態をイメージして完成させました。このころ、第一級陸上無線技術士を取得しました。

生徒研究発表指導「備長炭燃料電池」で全国 2 位、「四点杖」で九州 2 位となりました。

大学院派遣

知能計測、電子材料の特性を活かした多機能センサーの研究・開発 電子白杖など、工学の視野が画期的に広がりました。

教育委員会

文化課では、「佐賀県立宇宙科学館ゆめぎんが」（佐賀県武雄市）の構想から開館まで携わりました。教育行政的な、予算獲得、建物、工事、展示構想、展示業者選定、運営などを経験しました。独自に自然現象のダイヤモンドダスト発生展示を開発し、見学者の列ができて開発の苦労が報われました。工業だけでなく、自然科学全般の展示・体験施設を建物から展示装置構築まですべて構築しました。事業予算の大切さ、一般の来館者への配慮、対応など自然科学教育についての視野を広げました。

教育センターでは、情報教育、工業教育を担当、ICT 教育業務の基礎・応用。小・中・高教師の指導の難しさと重要性を実感しました。

感想

いろいろな職場、職員、保護者、生徒、教育活動を通じて実感したのは、信頼関係の大切さです。「技術は人なり」を柱に、工学への興味を持ちながら、100 年前の真空管ラジオの修復・再生からブロックプログラム等でのマイクロビット教材、山あり谷ありの教師生活 46 年目を迎えました。

支えとなったのは、東京電機大学での学びや思い出だと思います。

東京都

情報Ⅰの代替科目としての工業情報数理の実践

東京都立六郷工科高等学校 ものづくり工学科 主任教諭

河野 恒義

■ はじめに

六郷工科高等学校は平成 16 年度開校の単位制工科高等学校であり、東京都・工業高校改革（Next Kogyo START Project）における最後の 1 校です。令和 7

年度から学科枠を取り払い、これまでのプロダクト工学科、オートモビル工学科、システム工学科、デザイン工学科、デュアルシステム科の 5 科を統合し「ものづくり工学科」1 科に生まれ変わりました。単

位制の特色を活かし2年次より多彩な自由選択科目が履修でき分野横断的な学びを生徒が主体的に取り組める新しいタイプの学校へと進化しています。

令和7年度より、これら学科改変を機に、それまで学科ごとに行われてきた「工業情報数理」の年間授業計画、授業コンテンツ、考查問題、評価基準などを統一し、複数教員による5クラス一斉授業を3単位で展開することになりました。

■ 工業情報数理の課題

ここで、工業科における「工業情報数理」の課題を整理します。工業情報数理は普通科「情報Ⅰ」の代替科目^[1]とされています。しかし、多くの工業高校では、授業を全国工業高等学校長協会の検定指導などに充てている学校も見受けられます。「平成30年改訂の高等学校学習指導要領に関するQ&A＜専門学科に関すること＞」^[2]では、「機械的に代替が認められるものではなく、代替する場合には、各学校には説明責任が求められます。」とあります。本校の取り組みは「情報Ⅰ」の代替科目としての説明責任を果たした上で、特色のある工業情報数理を実践したものです。続いて工業情報数理のカリキュラムについて要点を表1に整理します。「情報Ⅰ」と「工業情報数理」では、学習指導要領上の本質的な違いがあります。「情報Ⅰ」は、「情報社会に主体的に参画するために必要な情報活用能力の育成を目指している」^[3]のに対し、「工業情報数理」は、「工業の各分野について情報技術の活用と事象を数理処理する視点で捉え、情報技術の進展への対応や事象の数理処理に必要な情報活用能力を育成することを目指している」^[4]とされています。

教科	普通教科「情報」	専門教科「工業情報数理」
目標	情報社会に主体的に参画するために必要な情報活用能力の育成	工業分野における数理処理に必要な情報活用能力の育成
能力	情報活用能力、論理的思考力、情報モラル、データ活用力	数値計算能力、アルゴリズム理解、工業分野への応用力
内容	①情報社会の問題解決 ②コミュニケーションと情報デザイン ③コンピュータとプログラミング ④情報通信ネットワークとデータ活用	①数値処理の基礎 ②アルゴリズムとプログラム ③計測・制御に関わる情報処理 ④工業分野への応用
共通テスト	「情報」の対象	「情報」の対象外

表 1

このように両者は目標や育成すべき能力の部分で視点が異なります。また各単元を比較すると「情報Ⅰ」では取り上げられていても「工業情報数理」では内容が不足している単元も見受けられます。特に「情報デザイン」に関して、「情報Ⅰ」では20ページ近く取り扱われている教科書もありますが「工業情報数

理」の教科書では、ほぼ取り扱われていません。「情報デザイン」は「情報社会に主体的に参画するために必要な情報活用能力の育成」を実践するためには必要な単元です。また代替履修に関する規定^[2]に照らし合わせても工業情報数理の中で「情報デザイン」を取り扱う必要があります。

■ 教材研究と授業計画

本校の「工業情報数理」を「情報Ⅰ」の代替科目であることの説明責任を果たすことを優先し、「工業情報数理」^[4]と「情報Ⅰ」のハイブリッド型授業として計画することにしました。双方の単元を比較すると、視点は異なるが多くの題材がオーバーラップしていることが分かります。このことを踏まえ、まず本校の時間割に合わせた年間授業計画を作成しました。ここまでの計画が令和6年度の3月末までなかったため教材作成は授業を行いながらの作業となりました。

授業毎に教科書に代わる授業スライドを作成し、定期考查毎に考查問題を作成して行く必要があります。授業進度も全クラスで統一していかなければなりません。さらに評価方法や評価基準も統一する必要がありますが課題が山積みでした。各単元の観点別評価に関しては、東京都教育委員会発行の「工業情報数理の手引き^[5]」を参考にしました。5クラス同時展開を進める中で最初の課題は授業を担当する教員の専門性の違いでした。教員によっては「情報Ⅰ」の単元が専門外の方もいらっしゃるため、単元の共通理解をどのように進められるかという課題がありました。そこでYouTubeから「情報Ⅰ」の授業の基準になる動画を探してみることにしました。その結果「せかチャン〜世界一わかりやすい情報科チャンネル〜」^[6]を参考にさせていただくことにしました。この動画を参考に授業スライドと確認クイズ（小テスト）を作成し、授業担当者で共有することにしました。授業担当者には作成したスライドとYouTube動画を授業前に視聴してもらうことで単元の共通理解をある程度実現することができました。

■ 授業実践の報告

「情報デザイン」を1学期に取り扱いました。「抽象化」の単元を学習した後に、各グループでテーマを考えピクトグラムをデザインし、各クラス内で発表してもらいました。

図1は2学期に行ったプログラミングのスライドの一部分です。教室に飾るクリスマスツリーを想定

してマイコンをプログラミングし LED を制御しました。2 学期にアルゴリズムとプログラミングを勉強した後ですので、各グループフローチャートを用いて点滅パターンを考えた上で各自の Arduino マイコンを用いて 3 色 LED を制御する課題に取り組みました。このように授業では定期的にグループワークとクラス内発表を実施しています。



図 1

図 1 (左) のマイコンボードは、私が基板設計を担当した本校オリジナルの Arduino UNO の互換ボードです。「工業技術基礎」のローテーション実習の 1 テーマ「電子工作」で全員に作らせています。



図 2

実際の授業の様子を図 2 (左) に示します。グループごとにフローチャートを書いて、制御パターンを設計しています。図 2 (右) は生徒が実際に書いたフローチャートです。White Board には、JIS 規格の図記号がありませんが、生徒は工夫してフローチャートを書いた上でコーディングし LED を制御していました。

■ 授業改善に向けて

評価については課題が残っています。令和 7 年度の観点別評価の素材は確認クイズ、考查得点を総合的に見取り判断しました。ここで、確認クイズへの解答率を“主体的に学習に取り組む態度”（以下、主体的態度）に加えたことにより問題が発生しました。確認クイズに解答する生徒は主体的態度の評価が高くなり、解答しない生徒は、主体的態度の評価が低

くなります。確認クイズには解答していても考查が低得点な生徒には CCA（知識 C、思考判断表現 C でも主体的態度が A）がつくことがありました。また考查得点が高くて、確認クイズに解答していない生徒には稀に AAC がつくこともありました。その他にも考查中に主体的態度を見取る方法についても工夫を行いました。試験を早く解き終わり考查中に寝てしまう生徒に着目し、考查問題の最後は「各単元で学んだことをどのように活かしていきたいか」について考查毎に 200 文字程度の作文を書かせるようにしています。この作文は、ループリックを用いて主体的態度の評価として反映しています。令和 8 年度は評価方法の改善に向け授業内評価を充実させることを目標にしています。令和 7 年度の反省はループリックの作成が間に合わず授業内評価が機能できなかった点でした。そこでサポート役（チームティーチング）の先生に主体的態度の部分を評価していただけるようループリックの作成を試行しています。

■ おわりに

当初からの懸案事項であった「情報 I」の代替科目としての「工業情報数理」の実践が実現できました。また、単に「情報 I」を実施することに留まらず、グループワークなども活用し、工業科として特色ある「工業情報数理」をしっかりと実施することができました。その際、本校 5 分野の教員がそれぞれの専門性とアイディアを出し合い複数の授業担当者が分担して授業コンテンツを作り上げることができました。今年度も定期的に考查問題の作成や評価方法について授業担当者が集まってミーティングを開いています。先生方の協力なしにここまでの取り組みは実現できませんでした。この場をお借りして感謝申し上げます。今後は教員による授業内評価と生徒による振り返りを実践するためループリックを共有し生徒の学びに役立つ授業に改善して行く計画です。

【参考文献】

- [1] 中村充宏.「工業情報数理による情報 I の代替履修に関する一考察」, 広島工業大学紀要教育編第 22 巻, 2023, 9-18.
- [2] 文部科学省.「平成 30 年改訂の高等学校学習指導要領に関する Q & A <専門学科に関すること>」.
- [3] 日本文教出版.「情報 I」. 情 I 116
- [4] オーム社.「工業情報数理」. 154 工業 723.
- [5] 東京都教育委員会.「工業情報数理の手引き」. 令和 6 年 3 月改訂版
- [6] せかちゃん.「世界一わかりやすい情報科チャンネル」YouTube. <https://www.youtube.com/@SekaChan>
- [7] 国立教育政策研究所「指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料（高等学校編）」

令和7年度・8年度の活動について

令和7年度

■ 令和7年度事業報告

- ・4月27日 役員会・事務局打合せ
総会および講演会の開催と配信、交流会（懇親会）の開催、会報第45号の発行、教職校友会枠推薦の実施を決定した。また、杉浦文俊会長の退職に伴う人事として、新会長に丸茂聡先生、東京支部長に荒繁勝先生、会計監査に河野恒義先生で調整とした。
- ・6月28日 令和7年度総会および講演会
総会および東京電機大学工学部情報通信工学科本橋光也教授による講演会「半導体と情報通信」を開催した。
- ・7月8日 会報第45号の発行
「学校紹介・教育実践紹介」を特集した会報第45号を発行した。
- ・8月23日 支部活動への協力
静岡支部総会開催に顧問向芝が参加した。

教職校友会枠推薦入試制度への協力

- ・9月5日 教職校友会枠推薦調整会議
全国14校から応募があり、29名の推薦を承認した。入試センターを通じて各学部でも承認され、29名全員が出願し合格した。

■ 令和7年度会計報告ならびに会計監査報告

令和8年6月27日

令和7年度 東京電機大学教職校友会 決算報告

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
前年度繰越金	626,791	会議費	38,360
会員会費	97,523	事務経費	17,240
雑収入	30,100	予備費	0
		次期繰越金	698,814
合計	754,414	合計	754,414

一般社団法人東京電機大学校友会から推薦入試関連、講演会講師謝礼の援助をいただいています。

会計幹事
森田 訓敏
後藤 真理子

厳正に監査し、相違ないことを認めます。
令和8年4月1日

会計監査
大田 智雄
河野 恒義

令和8年度

■ 令和8年度事業計画（案）

- ・総会および講演会開催
総会および講演会の開催を計画する。
総会・講演会は会場参加が叶わない会員のためオンライン配信を計画する。
- ・交流会の開催
総会開催に合わせ、交流会（懇親会）を開催する。
- ・令和8年度会報（第46号）の発行
会報は各支部や会員等に協力を要請し、読み物としての充実を図る。
特集記事のテーマは「学校紹介・教育実践紹介」とする。
- ・会員情報調査・メールアドレスの収集
随時情報収集に務める。
- ・支部活動への協力
各支部の総会開催などに協力する。
- ・教職校友会枠推薦入試制度への協力
例年通り実施する。
- ・役員会・事務局打合せの開催
事業の計画・実行のための会議・打合せを随時開催する。

■ 令和8年度予算（案）

令和8年度 東京電機大学教職校友会 予算(案)

(令和8年4月1日より令和9年3月31日まで)

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
前年度繰越金	698,814	会議費	50,000
会員会費	70,000	事務経費	30,000
雑収入	0	講師交通費	25,000
		予備費	663,814
合計	768,814	合計	768,814

このほか、東京電機大学校友会、東京電機大学からの援助が予定されています。

令和8年度 顧問・役員・幹事一覧

※ 随時確認をしておりますが、情報不足のための誤りを危惧しています。情報をお寄せください。(編集担当)

顧問	学校法人東京電機大学理事長	渡辺 貞綱	会長	東京都立雪谷高等学校長	丸茂 聡
	東京電機大学大学長	射場本 忠彦			
	一般社団法人東京電機大学校友会理事長	森戸 義美	副会長	栃木県立那須清峰高等学校	高松 秀和
				茨城県立勝田工業高等学校	藻垣 拓郎
	(元)群馬県立伊勢崎工業高等学校長	町田 峯勝		東京都立田無工科高等学校長	荒 繁勝
	(元)山形県立長井工業高等学校長	山口 康夫		埼玉県立狭山工業高等学校長	田中 克典
	(元)東京都立港工業高等学校長	村上 尚		(元)東京都立工業高等専門学校教授	前田 治
	(元)神奈川県立神奈川工業高等学校長	久保倉 清		神奈川県立向の岡工業高等学校副校長	嶋村 圭一
	(元)埼玉県立春日部工業高等学校長	星野 時二		山梨県立都留興譲館高校	田中 祐司
	(元)福島県立小高工業高等学校長	井上 精三		(元)静岡県立科学技術高等学校校長	松村 照司
	(元)東京都立練馬工業高等学校長	小池 敏男		千葉県立京葉工業高等学校	中村 啓介
	(元)東京電機大学高等学校教頭	中村 隆一	幹事	神奈川県立磯子工業高等学校	小室 卓也
	(元)東京都立府中工業高等学校長	平林 洋志		東京電機大学中学・高等学校	河野 吉伸
	(元)国立東京工大付属工業高等学校副校長	青木 輝寿		東京電機大学中学・高等学校	米山 裕
	(元)東京都立武蔵野北高等学校長	小原 政敏			
	(元)群馬県立高崎工業高等学校長	加藤 通顯	庶務幹事	東京都立北豊島工科高等学校	渡邊 博之
	(元)東京電機大学中学校・高等学校長	高久 廣毅		千葉県立千葉工業高等学校	清崎 起代則
	(元)関東第一高等学校長	吉村 正昭			
	(元)神奈川県立神奈川工業高等学校長	梅田 政勝	会計幹事	東京都立墨田工科高等学校	森田 訓敏
	(元)東京都立多摩工業高等学校長	橋本 三男		東京都立六郷工科高等学校	後藤 真理子
	(元)福島県立小名浜高等学校長	田仲 敏晃			
	(元)福島県立湯本高等学校長	辺見 広一	会計監査	東京都立足立工科高等学校主幹教諭	大田 智雄
	(元)静岡県立静岡工業高等学校長	佐藤 義雄		東京都立六郷工科高等学校	河野 恒義
	(元)関東第一高等学校長	池田 二郎			
	(元)東京電機大学高等学校教頭	見崎 正行	特別会員	(元)千葉県立清水高等学校	石渡 祥照
	(元)埼玉県立久喜工業高等学校長	新井 誠		(元)静岡県立清水工業高等学校教頭	大越 和夫
	(元)静岡県立藤枝北高等学校長	山口 房夫		(元)神奈川県立向の岡工業高等学校教頭	河本 一利
	(元)埼玉県立騎西高等学校長	廣瀬 成一		(元)東京電機大学高等学校	前嶋 万人
	(元)神奈川県立神奈川総合産業高等学校副校長	平野 隆士		(元)静岡県立浜松工業高等学校教頭	松本 恒彦
	(元)山梨県立谷村工業高等学校長	数野 均		(元)千葉県立京葉工業高等学校	山本 義彦
	(元)東京都立蔵前工業高等学校長	豊田 善敬		(元)栃木県立真岡工業高等学校	小堀 英雄
	(元)東京電機大学高等学校教頭	津村 栄一		(元)読売東京理工専門学校	松下 祐輔
	(元)尚志高等学校副校長	網田 雄治		(元)大森学園高等学校	加藤 三郎
	(元)群馬県立桐生工業高等学校校長	樋口 高則			
	(元)東京都調布市立第四中学校長	藤倉 正道			
	(元)東京電機大学中学校・高等学校長	向芝 京太			
	(元)埼玉県入間市立藤沢中学校長	佐藤 文憲			
	(元)神奈川県立商工高等学校副校長	櫻場 博			
	(元)東京都立足立工業高等学校副校長	瀧澤 龍司			
	(元)東京都立蔵前工業高等学校長	三神 幸男			
	(元)山梨県立甲府工業高等学校校長	手塚 幸樹			
	(元)埼玉県立大宮工業高等学校長	清水 雅己			
	(元)東京都立工芸高等学校長	杉浦 文俊			
	(元)千葉県立京葉工業高等学校	森本 圭一	事務局	東京都立北豊島工科高等学校	渡邊 博之
				千葉県立千葉工業高等学校	清崎 起代則
	一般社団法人東京電機大学校友会事務局長	天谷 忠史		(元)東京電機大学中学校・高等学校長	向芝 京太

令和8年度 教職校友会会員数 都道府県住所別 学校種別分類

	OB	高校	養護	中学	小学	高専	専門学校	その他	大学	短大	非常勤	計
北海道	4	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	7
青森県	3	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	8
岩手県	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7
宮城県	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	5
秋田県	1	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4
山形県	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
福島県	10	16	0	6	0	0	0	0	0	0	0	32
茨城県	14	20	2	6	1	1	0	1	1	0	1	47
栃木県	7	15	0	5	0	0	0	1	0	0	0	28
群馬県	11	19	0	9	0	0	0	0	0	0	1	40
埼玉県	83	106	4	50	4	0	5	1	1	0	13	267
千葉県	80	44	0	21	0	0	0	4	0	0	1	150
東京都	91	120	4	21	0	1	3	1	1	0	2	244
神奈川県	57	42	0	12	0	0	0	1	0	0	1	113
新潟県	4	3	2	1	1	1	0	0	0	0	0	12
富山県	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	7
石川県	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
福井県	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
山梨県	9	9	0	2	0	0	0	1	0	0	0	21
長野県	5	6	1	6	0	0	0	0	0	0	0	18
岐阜県	1	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	5
静岡県	25	16	0	9	0	0	1	0	0	0	2	53
愛知県	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4
三重県	2	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	6
滋賀県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
京都府	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
大阪府	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
兵庫県	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3
奈良県	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
和歌山県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鳥取県	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
島根県	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
岡山県	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
広島県	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
山口県	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4
徳島県	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
香川県	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
愛媛県	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
高知県	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
福岡県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
佐賀県	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
長崎県	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
熊本県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大分県	4	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	6
宮崎県	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
鹿児島県	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
沖縄県	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3
その他	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
計	456	447	14	162	8	5	9	11	4	0	23	1139

65歳を超えた方はOBとして集計してあります。65歳以前に退職された方、65歳を超えて現職の方はご連絡ください。

東京電機大学教職校友会 会則

第1条 本会は、東京電機大学教職校友会と称し、昭和43年8月1日設立。事務局を東京都足立区千住旭町5番におく。

第2条 本会は、学校法人東京電機大学及び、一般社団法人東京電機大学校友会と緊密に連繋し、その発展に協力し、会員の資質の向上と親睦をはかることを目的とする。

第3条 本会は、次の会員をもって組織する。

- 一、正会員 東京電機大学の経営する各学校の卒業者で、現に小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、盲・ろう・養護学校、高等専門学校、専修学校、その他の教育機関に勤務する者。
- 二、特別会員 本会の趣旨目的に賛同する者で役員会の承認を得た者。

2. 本会に次の顧問をおく。

- 一、東京電機大学の経営する各学校の学長および校長。
- 二、本会に特に功労のあった者で、役員会が推薦する者。

第4条 本会に次の役員をおく。ただし任期は2年とし、再任を妨げない。

会 長 1名 副会長 若干名
幹 事 若干名 庶務幹事 2名
会計幹事 2名 会計監査 2名

2. 会長及び副会長は会員のうちから役員会が選出する。
3. 幹事は各支部ごとに支部長の推薦するものとする。

第5条 会長は、本会を代表し会務を総理する。

2. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある時は会長の職務を代行する。
3. 役員および幹事は、会長の命を受けて会務を処理し、会計監査は会計を監査する。

第6条 本会の会合は、次のとおりとする。

- 一、総会 毎年一回開き、会務報告その他必要事項を審議する。
- 二、役員会 必要に応じて会長が招集し、会

務を処理する。

- 三、その他の会合 会長が必要と認める場合は、前二号以外の会合を召集することができる。

第7条 本会の目的を達成するための経費は会費、補助金および寄付金による。

2. 会費は、正会員1名につき年額1000円とする。ただし、会長が特に必要があると認める時は役員会にはかり、臨時会費を徴収することができる。
3. 本会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第8条 第8条 この会則は、総会において出席会員の過半数の同意により変更する事ができる。

1. この会則は、昭和43年8月1日より施行する。
2. 本会の運営のために必要な細則は役員会にはかり、会長が別に定める。
3. 昭和47年2月20日
会則の一部を変更し、施行する。
4. 昭和48年6月11日
会則の一部を変更する。
5. 昭和50年3月31日
会則の一部を変更する。
6. 平成6年12月10日
会則の一部を変更する。
7. 平成8年6月22日
会則の一部を変更する。
8. 平成27年6月22日
会則の一部を変更する。

【申合せ事項】

1. 本会の目的を達成するため、都、道、府、県に都道府県支部会を設ける事ができる。各支部会の会則は、各支部において別に定める。
2. 各支部会は都道府県の支部長を長とし、必要に応じ支部会内に役員を設け、支部会の事業を行うものとする。支部長は本会の副会長とする。
3. 本会が全国組織の会であるため、総会に多数の出席が困難と予想されるときは、役員会の原案を書面連絡で審議して決定することができる。

令和 8 年 7 月

会 員 各 位

東京電機大学教職校友会

会費納入のお願い

会員の皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。皆様には日頃より東京電機大学教職校友会の活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

さて、本会は、教職に携わっていらっしゃる卒業生のなかで事務局が把握できた方々を会員とさせていただいている組織です。したがって、必ずしも皆様の入会意思を確認させていただいたり、申込み手続きによる処理などをとることはいたしていません。しかし、全国各地の教壇で活躍される卒業生は、母校にとって大切なネットワークであることから、学校法人東京電機大学および一般社団法人東京電機大学校友会は、本会の活動に対して大きな期待を寄せております。教職校友会の活動は、微力ながらも母校東京電機大学および東京電機大学校友会と一体となり、学園発展への一助をなすものと確信しております。

本会の活動に当たっては、学校法人東京電機大学および一般社団法人東京電機大学校友会より多大の援助を頂いてはおりますが、この度は年会費の振込用紙を同封させていただきました。会費の納入は会員の皆様にご無理をお願いするものではございませんが、教職校友会の趣旨をご理解いただきまして、多くの皆様にご協力を賜りたくお願い申し上げます。年会費は 1000 円となっております。

なお、自動引落として年会費を納入して頂いている皆様にも、発送手続きの処理上、振込み用紙を同封いたしました。失礼の段お詫び申し上げます。

末筆でございますが、会員の皆様のますますのご活躍をご祈念申し上げます。

令和 8 年度 会報 第 46 号

発行日 令和 8 年 7 月 8 日

東京電機大学教職校友会

編集責任 向芝 京太

事務局 一般社団法人東京電機大学校友会内

〒120-8551

東京都足立区千住旭町 5 番 東京電機大学 1 号館 2 階

電話番号 03-5284-5140

FAX 番号 03-5284-5187

e メール kouyukai@jim.dendai.ac.jp

郵便振替口座 00100-4-71400